國學院大學学術情報リポジトリ

昔話「貧乏神」攷：話型と構造の整理

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-03-15 キーワード (Ja): 昔話, 貧乏神, 話型, 構造, 教訓 キーワード (En): 作成者: 羽鳥, 佑亮, Hatori, Yusuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001480

昔話「貧乏神」攷
―話型と構造の整理―

羽鳥佑亮

緒言

貧乏神は、誰もが知る神格であろう。拙稿にて、貧乏神が登場する話を論じ[1]、貧乏神の図像の変遷を論ずること[2]があったが、いずれも文献に記載されたものを基としていた。だが、言うまでもなく、貧乏神の跳梁跋扈するのは文献のみではない。津々浦々の昔話においても蠢いている。

では、各地の昔話に顕現する貧乏神は、どのような話型にあらわれ、何を示すのだろうか。昔話はこれまで、構成を示したタイプ・インデックス［話型索引］によって整理がなされてきた。すなわち、話型に番号を付し命名するもので、国際的な基準としては、欧米で編まれたＡＴ分類や改訂したＡＴＵ分類が用いられる。日本でも、細かくは略すが、柳田國男氏による『日本昔話名彙』における分類をはじめ、関敬吾氏による『日本昔話集成』における分類や、これを改訂した『日本昔話大成』における分類、稲田浩二氏や小澤俊夫氏らによる『日本昔話通観』における分類など、様々に整理が試みられてきた。しかし、現在にも多く用いられる話型索引で貧乏神を確認すると、貧乏神が話型のひとつの要素に過ぎないものまで「貧乏神」と冠した

話型と整理したり、各々で構成に差異があったりと、問題が多い。既存の話型整理が、今日においては古めかしくなりつつあることも要因のひとつであろう。いわば、昔話「貧乏神」の統一話型を確立することが喫緊の課題である。

話型の整理に問題があるにも関わらず、これが等閑視されてきたがために、貧乏神に言及するものは、概説書、乃至、先行研究ともに、様々な昔話を、見境なく十把一からげに用いることがあり、論ずるに耐えなかった。もちろん、仮の統一話型を確立したところで、これに逸れた昔話を切り捨てようとするものではない。貧乏神のあらわれる昔話を広く通覧し、また、ひとつの昔話を深くみることは確かに重要であろう。しかし一方で、話型を考慮せぬまま論ずるのはあまりに粗野である。闇雲にあつめた昔話を指針のないままに一覧表とし、あるいはその反対に、無造作に選びとったわずかな昔話のみに執着するのは、かえって今後の論考の妨げとなる。

そこで本稿では、昔話における貧乏神を論ずるための基礎研究として、ひいては現行の話型整理への提言として、昔話「貧乏神」という話型を改めて見直し整理することで、構造にまで踏みこんでいく。

一　先行研究

昔話における貧乏神を論ずるもののうち、概説書に紹介される程度のものや、論文の一部に参考として言及されるに過ぎないものを除外すると、加藤まどか氏による論考[3]が最も詳細である。「貧乏神伝承の構造」では、全国の貧乏神のあらわれる昔話を博捜したうえ、それらの昔話からA～Kという要素を抽出し、貧乏神のあらわれる昔話はこの要素の組合せとする。これを引用すると、

……以上のことからこれらの昔話は、

A：貧しい状態
B：貧乏神がとりつく
C：貧乏神が入る
D：福の神が去る
E：豊かさを得るための対応
F：豊かさを得る方法の暗示
＊：貧乏神が豊かさをもたらす
G：豊かさの獲得

H：貧乏神が去る
I：福の神が入る
J：貧乏神の福の神化
K：貧しさと豊かさの選択肢の提示

という要素の組み合わせで構成されていると言うことができる。例話以外の資料も同様にA～Kの要素の組み合わせで話が構成されていることを確認した。

となる。これを基に、さらに発端・過程・結末とにわけた表において一九の類型を提示し、「貧乏神の登場する昔話の構成、分類から、日本人は、豊かさを得ることができるかできないかは、行動によって変わってくるという考えを持っているということがいえそうである」とする。

詳細な分析であり、貧乏神の登場する昔話の全体からすれば是である。しかし、前提として扱う昔話に問題があろう。取りあげる昔話は、貧乏神があらわれている、という一点によりひとくくりに論ずるため、貧乏神が要素としてのみ登場する昔話を用いる分析や、孤立伝承話を一般化しての分析であり、各々の話型の特徴を考慮していない。また、詳細であるがために、かえって抽出した要素に基準のようなものがなく漠然とし、不必要な要素までも抽出しているさまがうかがえ、重複した整理もあるなど、難があると言わざるを得ない。これをもって話型が整理できたとはいえず、結論の依るところが曖昧である。

二　タイプ・インデックス［話型索引］での整理

タイプ・インデックス［話型索引］においては、どのように整理されているのだろうか。現行に用いられることの多い、『日本昔話大成』、『日本昔話通観』では、それぞれ貧乏神の語彙を含む話型が整理される。少し冗長になるが、貧乏神のあらわれる昔話がどのようなものか把握するため、これを引用する。

◎『日本昔話大成』「昔話の型」[4]

※貧乏神の名を昔話の名称に冠する話型・モチーフ構成に貧乏神のあらわれる話型を引用。

※見やすさを考慮し、モチーフ構成ごとに改行。

・本格昔話

九　大歳の客

二〇一A　貧乏神（cf.AT 七五〇A）
1、無精な貧乏者夫婦がよそに働きに行く相談をする。
2、貧乏神（爺・小人）が一緒について行く準備をする。
3、夫婦は出稼ぎをやめて働くようになる。

二〇一B　貧乏神（cf.AT 七五〇）
1、貧乏者が(a)金持ちになりたいと祈願する。または(b)なげく。
2、神（貧乏神）があらわれて、(a) 金を積んだ馬（金光りの行列）・銀を積んだ馬（銀光りの行列）・銅を積んだ馬（銅光りの行列）、または (b) 殿様の行列が通るから、第一のものに飛びつけと教える。
3、(a) 貧乏人は気おくれして第三のものに飛びつくと、(b) 銅をつかむ。(c) 同じ貧乏神。または (d) 三回試みるが銅をつかむ。四回目に成功して小判をつかむ。

・笑話
二　誇張譚
四七一　何が怖い（cf.AT 五六六、一〇〇二）
1、博打うち（怠け者・彦市・吉五）が天狗を欺いて、(a) さいころ（穴開銭・笊）と宝物（扇・宝瓢・隠れ蓑笠）と交換する。または (b) 天狗（化け物・茸の化け物・蛇・狐・貧乏神・猫）にあい、その恐れるもの（藪・鉄砲・煙草の脂・火・白水・犬・味噌汁・茄子・塩水・松脂）を知り、これで退治または苦しめる。
2、天狗は博打うちのいやなもの（金・大判小判・米・牡丹餅・饅頭・小豆餅）を投げつけて復讐する。
3、博打うちはそのために金持ちになる。

◎『**日本昔話通観第二八巻　昔話タイプ・インデックス**[5]』
※貧乏神の名を昔話の名称に冠する話型・モチーフ構成に貧乏神のあらわれる話型を引用。ただし、実際には貧乏神のあらわれない「九六七　貧乏神と福の神」を除く。
※見やすさを考慮し、モチーフ構成ごとに改行。

五八　大みそかの金馬
①貧しい男のもとに貧乏神が現われて世話になったお礼を言い、大みそかの夜表を通る金と銀と銅との馬に乗る侍の、どれでも突き倒したものを与える、と告げる。

〔B184.1,H1154.8,Z133〕
②その夜威風堂々と金の馬が来るが男はやり過ごし、つぎの銀の馬もやり過ごす。〔W121〕
③最後にたどたどしく来る銅の馬に体当たりすると、わずかな銅銭が手に入る。
（中略）
〈注〉貧乏神は福の神と表裏一体的な存在で、このタイプでも、貧乏をもたらしていた神が福を授けることになる。

五九A　貧乏神―何が嫌い型
①貧しい一家が食いつめて夜逃げしようとすると、小さな男がついてくるしたくをしている。〔F481.3,Z133,cf.A473.0.1〕
②一家があきらめて留まって働くと、貧乏神は嫌いなことをすると怒り、がらくたを投げつけて去る。〔N134〕
③がらくたはお金に変じ、一家は金持ちになる。〔D475.2,P150〕
（中略）
〈注〉貧乏神が福の神を伴って行動することもある。

五九B　貧乏神―大食い型
①貧しい男が咳をすると小さな男がとび出し、ろくに食わせてくれないから隣の金持ちとの境に埋めてくれ、と頼む。〔Z133,cf.A473.0.1〕
②金持ちが屋敷を広げようと境を掘ると、現われた瓶から出た小さな男がその口にとびこむ。〔P150〕
③金持ちは小さな男に食い荒らされて貧しくなり、貧しい男は金持ちになる。〔F496,N134,Q272〕
（中略）
〈注〉「壺の鬼」参照。

六六一　何がこわい
①男が、女に化けた狐に出会い、何がこわい、と聞かれて、小判だ、と答えると、女は、私は犬だ、と言う。〔D313.1,J1110〕
②男が犬を女にけしかけると、女は狐の正体をあらわして逃げる。〔D113.3,Z312〕
③狐は夜男の家に小判を投げこみ、男は金持ちになる。〔J1700,L121,P150,Z253〕
（中略）

〈注〉(1)狐は天狗・大蛇・貧乏神・キジムナーなどに置き変えられる。(2)「たのきゅう」「宝物交換」などのエピソードとされることが多い。

引用した、『日本昔話大成』、『日本昔話通観』による整理は、重複するもの、乃至、「大成」にのみ整理されるものもある。この段階で既に統一なされていないが、『日本昔話大成』、『日本昔話通観』での整理を引用したのみではわかりにくいため、まずはこれらが対応するよう並べ整理する。すると、『日本昔話大成』、『日本昔話通観』による整理は、次のような四つの話型を示すといえる。

話型〈い〉

・『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」
・（『日本昔話通観』「五九A　貧乏神　—何が嫌い」）

話型〈ろ〉

・『日本昔話大成』「二〇一B　貧乏神」
・『日本昔話通観』「五八　大みそかの金馬」

話型〈は〉

・『日本昔話大成』「四七一　何が怖い」
・『日本昔話通観』「五九A　貧乏神　—何が嫌い」
・『日本昔話通観』「六六一　何がこわい」

話型〈に〉

・『日本昔話通観』「五九B　貧乏神　—大食い型」

便宜上、話型〈い〉～話型〈に〉とした。話型〈い〉については、『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」を基準とすれば、確かに該当する昔話も多い。しかし、話型〈ろ〉以降はほとんど問題がある。

話型〈ろ〉は、管見には貧乏神が登場しない方が多い昔話であり、『日本昔話大成』「二〇一B　貧乏神」において、貧乏神と冠するほど貧乏神を主とする昔話とは思えない。さらに、『日本昔話通観』「五八　大みそかの金馬」において、「〈注〉貧乏神は福の神と表裏一体的な存在で、このタイプでも、貧乏をもたらしていた神が福を授けることになる」とするが、貧乏神の研究があまり進まぬ段階で断ずるのは不審である。

話型〈は〉は、『日本昔話通観』「五九A貧乏神　—何が嫌い

型」の、モチーフ①、モチーフ②の前半部分を切りとれば、話型〈い〉と同一である。このために、話型〈い〉にまで「(『日本昔話通観』「五九A貧乏神　—何が嫌い型」)」と記したが、二重の整理であり、妥当とはいえない。「〈注〉貧乏神が福の神を伴って行動することもある」は孤立伝承話のモチーフのひとつであり、ここで提示すべきでなく、そもそも、『日本昔話通観』「六六一　何がこわい」「五九A　貧乏神　何が嫌い型」は、前者に話型〈い〉の付属の有無と、要素が異なるのみであり、ここでも『日本昔話通観』内のみで二重の整理である。

話型〈に〉は、『日本昔話通観』のみにおいて示される話型だが、『日本昔話通観』に載る合致する昔話は、宮城県登米郡南方町青島（原題「食いしん坊」）[6]のほかになく、孤立するひとつの昔話のみを整理したものである。類話がないにも関わらず話型として独立させるのは、国際比較のため、外国の昔話との対応を重要視したためと思われるが、日本の昔話の事例を全体から見れば、あくまで例外であり、そもそも、「食いしん坊」として語られる。

このように、『日本昔話大成』、『日本昔話通観』による話型整理には難が多く、そのまま用いることはできない。新たに、昔話「貧乏神」の統一話型を確立することが喫緊の課題である。

なお、以降に話型を示す際には、便宜上の、話型〈い〉～話型〈に〉に併せ、『日本昔話大成』において整理される話型は『日本昔話大成』「番号　話型名」、『日本昔話通観』において整理される話型は『日本昔話通観』「番号　話型名」、私に用いる話型は、昔話「話型名」として示す。

三　昔話「貧乏神　—〇〇型」話型整理

話型の整理を行うにあたり、まずは先に『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」に該当する、話型〈い〉に合致する昔話を引用する。

福島県南会津郡舘岩村貝原（原題「貧乏神」）

ざっと昔があったと。

〈大成モチーフ1〉貧乏で〳〵家にいねで外さ行って暮らすべど思って考えやったらば、

〈大成モチーフ2〉下縁の隅の方に赤い着物を着て唐傘を横に背負ったがな履物を作ってんだと。それから聞いてみやったと。「にしはなんだ」「お前の行ぐどこさ行ぐ貧乏神だ」。そんじぇ、

〈大成モチーフ3〉たまげて「どこさ行っても、こうだがなにくっつがっつぇ行がっちぇは、とてもえゝせぇねえから吾が家にいて節角働いてんべ」と思って、

〈想定モチーフ4〉家も綺麗にする、心を入れ替えて働きやったらば、それがしめぇには「おれはここにいらんにぇ」どって、暇乞いして行ってしまっただと。

それから大変えゝ暮らししゃっただと。いちが栄え申した。[7]

『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」において整理されるモチーフ構成にのっとり、昔話のどの箇所に各々のモチーフが該当するか、便宜上に改行し、仮に〈大成モチーフ〉として付した。すると、『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」でのモチーフ構成にはあらわれないモチーフが結末にあらわれることが確認できる。『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」でのモチーフ構成は三つのモチーフによるため、これを仮に、四つめに想定されるモチーフとして、〈想定モチーフ4〉として示した。すなわち、主人公が働くようになっただけではなく、その後の貧乏神の動きが連ねられ、貧乏神が逃げていく、退散するというようなモチーフが付されるのである。

この一例のみでは、短い昔話であり些細なことを針小棒大にとりあげている感があるため、もう一例、昔話を引用する。

新潟県長岡市麻生田町（原題「びんぼう神」）

あったてんがの。

〈大成モチーフ1〉あるどこに、びんぼうな、ふうふがあったてんがの。ほうして、あけてもくれても、びんぼうで、どうしょうもねえ。ていしゅが大工だども、はたらかんで、のめしこきで、あそんで、酒ばっかのんでいるんだんが、びんぼうだてんがの。ほうしるんだんが、かかが、「こんげどこに、こうしていても、くていらんねんが。」とおもて、「とっつあ、とっつあ、旅へいって、はたらいてくらせばいいねけえ。」というたてんがの。ていしゅも、「おう、そうしょう。」と、そうだんがきまったてんがの。

〈大成モチーフ2〉ほうして、夜さる、かかが、にやの方へいってみたれば、としよりのじさまが、しんけんで、ワラジをつくっているてんがの。「おうこ、じさ、お前、こんげんどこで、なにしていらっるがら。

どごの人だ。」「いや、もとから、ここのうちにすんでいる、びんぼうの神だ。お前がた、あしたは、旅だちするてがらんだんが、おれもついていごうとおもて、ワラジをつくっているがら。」ほうしたれば、かかが、「いやいや、びんぼう神が、ついてくれば、どごへいったっても、おんなじことだすけ、旅へいがんで、ここにいることにしょうて。」と、とっつあにいうて、そこにいることにしたてんがの。

〈大成モチーフ3〉ほうしたれば、とっつあが、「これや、まあ、どごへいっても、しごとをしねえけや、びんぼうになっているがらすけ、そいじゃ、あしたから、しんけんで、しごとをしょう。」と、おもていたれば、

〈想定モチーフ4〉よその人が、「大工どん、大工どん、戸がはずれて、おおごとだすけ、はめにきてくらっしゃい。」「そうか、そうか、いぐで。」ほうして、戸をはめてやったれば、「お前は、酒がすきだんが、戸をはめてもろたかねだすけ、酒でも買うてのんでくれ。」というて、ぜんをくれたてんがの。ほうしているうちに、よその人が、「大工どん、大工どん、きょうは、おらどこへ、いちんち、しごとにきてくれ。」と、あっちからも、こっちからも、しごとをたのみにくるんだんが、大工のとっつあは、しごとに、せいを出すようになったてんがの。ほうしたれば、大工のうちは、しんしょがよくなりはねて、らくになってきたてんがの。ほうしると、びんぼう神は、いたたまらんで、にげていってしもたてんがの。

いきがポーンとさけた。[8]

この昔話ではよりわかりやすく、働いた後日譚として繁盛する過程があらわれ、貧乏神は退散する。すなわち、『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」でのモチーフ構成を用いる、話型〈い〉において、結末で働くようになるのであれば、仮に〈想定モチーフ4〉とした、「4、働いたことで貧乏神が退散し富貴を得る」というモチーフも付されねばならない。

しかし、これを付すのみでひとつの話型として整理するのは安直であろう。それは、「4、働いたことで貧乏神が退散し富貴を得る」というモチーフはおろか、『日本昔話大成』「二〇一

A　貧乏神」「3、夫婦は出稼ぎをやめて働くようになる」までも欠如する昔話が散見されるためである。

神奈川県鎌倉市大船（原題「貧乏神さま」）

〈大成モチーフ1〉あるところにどうしても貧乏な貧乏な村があってね。いくらここで稼いでも頭が上らないから、今夜はいっそ夜逃げしようじゃないかと、夫婦ものが風呂しき包みをこしらえてうんそらうんそら行ったんですと。そしたら行く手に大きな川があったんですっと。

〈大成モチーフ2〉川の傍までくると貧乏神がポカッと立っていた。そして「お前っちゃあ　なにしてたんだ、おりゃあさっきからここで待ってたんだ。わしゃお前んとの貧乏神だ。おめえらはここを越えて川向うへ行くだべと思って、さっきから待ってたんだ。おめえらはいくら川向うへ行ったって貧乏ははなれゃしねえよ」といったかと思うとポッと消えてしまった。[9]

愛媛県越智郡玉川町（原題「貧乏神」）

〈大成モチーフ1〉奈良の木部落の昔のお話です。ある人里離れた山のふもとに、いまにも風が吹けばたおれるような家がありました。そこには八人家族が住んでいました。祖母、父、母、子供が五人いました。その家はたいへん貧しく、食べる物も、食べれないしまつでした。ある年の、としのよさにそこの主人が子供達を集めていいました。「もう、ここにいても貧しくて死んでしまう。寂しいけれど、この住みなれた、この部落を捨てるよりほかにしかたがない。」子供達も、しかたなく一週間後に町へ引越しする事になりました。そして家のかたづけをしていました。村の人々は各家から一人ずつ出て、その家のくわ、かま、なべなどを一銭のねうちもないのに人々は同情して買ったそうです。かたづけも終わって家族が一わずつわらを持って来て、わらじを編んでいました。

〈大成モチーフ2〉子供が父の方を向いて、そっとささやきました。「おとうちゃん、ちょっと見て見ろ。」「どうしたんだ、平太なにがいるんだはっきりいってみろ。」「よく見ろよ、あわてないでそこ、あそこになに

かいるよ。」と言われて父がそちらを見ると、一寸丈ぐらいの貧乏神がこっちを向いて「ヒヒヒッ！。」と笑っています。父が「貧乏神なぜ、おまえは笑っているのだ。」とたずねました。すると貧乏神は、「おまえが引越しをするので、わしも今わらじを作っていっしょに行こうと思っている所だ。」そこで父は考えました。一升ますはどんなにしても一升しかはいらないことがわかったそうです。父はこれを知って引越しをやめたそうです。[10]

引用したどちらの昔話においても、『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」「3、夫婦は出稼ぎをやめて働くようになる」以降のモチーフが欠如する。主人公は働くことを諦め、貧乏神がついてくるという、貧乏のままであることを示唆するのみで結末を迎える。

これらの昔話を整理するにあたり、「3、夫婦は出稼ぎをやめて働くようになる」相当箇所に、仮に「夫婦は出稼ぎをやめて富貴を諦める」というモチーフを想定し、(a)，(b)の分岐とすれば、ここに限れば解決する。しかし、これもまた早計である。それは、「3、夫婦は出稼ぎをやめて働くようになる」には、「4、働いたことで貧乏神が退散し富貴を得る」が暗に付されているためであり、これのみで成立する昔話もまた散見されるためである。

新潟県南蒲原郡下田村（原題「貧乏神」）

〈想定モチーフ4〉昔々、あったとこへ、貧乏の家があって。その貧乏のしょは、子供が大勢いたったって。母ちゃんは、守っ子しょんまんで、かせがんねぇで、父ちゃんばっか、遠くの方へ稼ぎに行ったったて。そんで正月になって、帰ってくることになったって。「とっつぁ帰ってくんるが、家でも、掃除しょうや。」、それで、きれげに、掃除し始めたと。そして、寝間の棚のあたりを見たら、きったなげぇな爺さがいたって。「あやぁ、こんげえんな爺さ。おめ、どごの人れ。」と聞くと、「俺けぇ、俺は、貧乏の神っちゅうて、だれこっぺんとこが大好きで気持ち良かったんだが、お前とこん家んしょが、今掃除し始めたから、俺いらんねっけん行ごんまね。」と、いって、その貧乏神が逃げっちょたって。

それで、父ちゃん帰ってきて、「今帰って来たよう。子供でっこなってたかぁ。ばっかげに一生懸命働いたんだんで、銭いっぺこと、とってきたっど。」「おめいっぺこと、銭とってきたのー、俺のー、今日、家の掃除してたら、どっかのきったねぇ爺さがいたったれも、こんど家、きれげにしゅうようなったんだんが、いらんね。てゆうて行ってしもたれ。」それから、かかも、一生懸命働くようになったし、掃除もしゅうよんなったって。[11]

引用した昔話は、貧乏神が何らかの世俗的に推奨される行為により退散させらるる一連の流れのみによって成立する。これにより、話型〈い〉は、前半部分（『日本昔話大成』「二〇一A貧乏神」モチーフ1、同2）と、後半部分（『日本昔話大成』「二〇一A　貧乏神」モチーフ3、仮に用いた想定モチーフ4）とに分けることができる。

まずは、前半部分を新たに、昔話「貧乏神　—随伴型」として新たに整理する。

昔話「貧乏神　—随伴型」

一、主人公は富貴を得るために引越の準備をする。
二、貧乏神は主人公についていこうと準備をする。
三、主人公は貧乏神がどこにいても随伴すると悟り引越をやめる。

さらに後半部分を、貧乏神が何らかの世俗的に推奨される行為により退散せらるる一連の流れのみの昔話として独立し整理したいが、貧乏神が退散せらるる昔話としてみるならば、貧乏神が呪術的な行為により退散させらるる昔話もあり、これも同様の話型として整理されよう。

山形県米沢市窪田（原題「貧乏の神」）

〈想定モチーフ4〉貧乏ぐらしの夫婦もので、なんぼかせいでも旦那から前借り、前借りで、もらう金ないがったど。そしてたった五円しかないがったど。年とりの日によ。その五円で何買ったらええがんべ、米もない、焚物もない、何もない。「ほんじゃらば、そいつで炭一俵買ってこい」て、炭一俵買ってきたど。そしてその囲炉裏さ山ほどゴウゴウとおこ

して、「ええ年とりだ、ええ年とりだ」て、あたっていたど。そしたば貧乏の神は火所の中さ入ってで、あつくていらんねくて、それからうんと富貴になったけど。

どーびんと。[12]

年越しに際し盛んに火をおこすという、俗信の兆占禁呪のうち呪術に入るような行為、恐らくは当地の習俗によって貧乏神の退散せらるる昔話である。一方は世俗的に推奨される行為により、一方は呪術的な行為（習俗）により貧乏神が退散する。どちらにおいても、何らかの行為で貧乏神が退散することは共通であり、(a)，(b) の分岐とできる。

昔話「貧乏神　—退散型」

一、主人公は (a) 世俗的に推奨される行為を、あるいは、(b) 呪術的な行為をする。

二、貧乏神があらわれ退散するそぶりをみせる。

三、貧乏神は退散する。

話型〈い〉は、昔話「貧乏神　—随伴型」と、昔話「貧乏神　—退散型」の複合とすることができる。昔話「貧乏神　—随伴型」はいわば、貧乏神がいることを示すのみの昔話であり、冒頭と結末で主人公に貧乏神が憑くという状況は変わらない。昔話「貧乏神　—退散型」は貧乏神が退散する昔話である。結末が異なるために複合しやすいと思われる。

しかしまたさらに、昔話「貧乏神　—退散型」では、主人公によるある行為によって貧乏神が退散するが、反対に、主人公によるある行為によって貧乏神が退散しない、貧乏神は退散するそぶりはみせるが、残るかむしろ増える、という昔話がある。

岡山県阿哲郡神郷町三室（原題「貧乏神」）

〈昔話モチーフ〉むかしあるところに、内輪の悪ぃ〳〵家があったそうな。何ぅ言ぅても、その家のおやじは、不理解者かしらんが、何ぅ言うても怒りっぺぇ、ぷんぷん〳〵〳〵ほんに怒りっぺぇ者で、ほんに笑ぇ声ども聞えるこたあなかったそうな。せえで、貧乏〳〵、この上もねえようにしとるんだそうな。せえで、村の人が言うことにゃあ、「おめえは、ほんに、あんまり苦虫ぅかんだような渋ぅ白湯を飲んだような顔をしとるけえ、せえで、貧乏神が

離さあで、せえで、幸運が来んのじゃあねえだろうか。もちいたあ浮き〳〵してみい。」いうて言ようたそうな。せえから、また、ある人ぁ、「あがあに、ぷんぷん〳〵怒っておらずに、ちいたあ、ほんに浮かれて、酒ども飲んで、ああ、こらこらで、ほんに家の内でも、にぎやかにしてみい。そうすりゃあ、貧乏神が離すかもしらんけえ。」いうて、言うて聞かしょうたそうな。せえから、そのおやじいも、まあ、そうしてみたもいいかもしらんいう気がしでえたふうで、銭もねえのに、人に勧められて、酒肴ぁ買うて、えっと飲んで、どんちゃん〳〵さわぇだそうな。毎日、どんちゃんさわぎぅしたそうな。そうしょうたところが、

〈昔話モチーフ二〉ほんに神さん棚からおんぼろさんぼろを着た神さんが、すーっと出てきて、にわの口ぅ出ようとして、後ろぇ向いて、にゃん〳〵笑ようたそうな。せえで、村の人が見つけて、「そうれ見い。あっこを見い。貧乏神が、とうとう出ようるがな。これでようなるぞ。」いうて、人が言うそうな。へえから、その中で、またほかの人が言うことにゃあ、「こりゃ、おめえ、こんだあこの家ぃ戻って来りゃあしめえのう。戻って来んようにしてくれえのう。」いうて、言うたそうな。

〈昔話モチーフ三〉そうしたところが、その貧乏神の言うことにゃあ、「あんまりおもしれえもんだけえ、仲間の者を大ぜえ連れて帰るよう。」いうて、言うたそうな。せえで、人にそそのかされて、そがあなざまぁしても、つまらん。ほんとうに、心から直ぇてやっていかにゃあいい幸運は来んいうことだそうな。むかしこっぷり　どじょうの目。[13]

鹿児島県曽於郡志布志町（原題「貧乏神」）

〈昔話モチーフ一〉どんなに夫婦で働いても立直りができない、貧乏な夫婦がいた。どうしても貧乏神が住みついているといって、床ん下から何から、生松葉で家をくすべた。

〈昔話モチーフ二〉二十九日の晩、体のちっこい神が転げだしてきた。夫婦が、「今度はもうかるど」と喜んでいると、

〈昔話モチーフ三〉年の晩にトントンと叩く者がいた。何だろう

かと戸をあけてひょっとのぞいたら、追い出した神が来とる。「お前のようなとはいらん」と言うと、「いや、実は残していたものがある。気がかりになってきた。お前んとこには身持ちのうっかたを忘れていた。あとはよろしく頼む」と言って行ったげな。[14]

先に整理した、昔話「貧乏神　—退散型」をもととし、仮に〈昔話モチーフ〉を付して提示した。前者の引用は、主人公が世俗的に忌避する行為によるもの、後者の引用は、先と同じく呪術的な行為によるものである。

これらの昔話もまた一見すると、昔話「貧乏神　—退散型」モチーフ三の相当箇所に、仮に「貧乏神は仲間を招集する」というようなモチーフを想定し、これを、(a)，(b) の分岐とすれば解決しそうである。しかし、殊に前者の主人公が貧乏神を退散せしめようとする行為は、誰がみても浪費するような行為である。現在の価値観によるものであると批判もあろうが、趣向としては異なるものであろう。よって、これを新たに話型として整理する。

昔話「貧乏神　—招集型」

一、主人公は (a) 宴会や遊興などの行為を、あるいは、(b) 呪術的な行為をする。

二、貧乏神があらわれ退散するそぶりをみせたため主人公は喜ぶ。

三、貧乏神は仲間を招集する。

ここまで、話型〈い〉を基として、昔話「貧乏神　—随伴型」、昔話「貧乏神　—退散型」、昔話「貧乏神　—招集型」として整理した。この三つの話型は、貧乏神は、貧乏の権化としてあらわれる。すなわち、貧乏神という要素が他の存在に互換されるならば成立することのできない話型[15]である。

四　要素の互換が可能である昔話

一方で次には、『日本昔話大成』「二〇一B　貧乏神」、『日本昔話通観』「五八　大みそかの金馬」に該当する、話型〈ろ〉に合致する昔話を引用する。

新潟県長岡市西蔵王町（原題「びんぼう神」）

〈通観モチーフ①〉あったてんがの。あるろこに、ひとらもんの、びんぼうなあにがあったてんがの。あるどき、ドンドンドン、火をたいてあたっていたれば、おかしな、やせた、ちんこい男が、二かいからおりてきたてんがの。「おめえ、なにもんだ。ここらで見かけねえが。」「そうだ。おらは、びんぼう神だ。ながながお世話になったが、このうちにも、いよいよ、福の神がまいこまっしゃるすけ、きょうは、いとまごいだ。」「おう、そうか。そら、ありがたい。」「お礼におめえに、いいことをきかしていごう。（中略、金の馬と銀の馬と銅の馬が通り叩くと金を得ることを教える）どこでもはたけばいいがら。」（中略）どっかへいったてんがの。ほうして、

〈通観モチーフ②〉つぎの朝、あには、棒をたがいて、早くからまっていたてんがの。ほうしると、遠くから馬の音がきこえてくるてんがの。あんにゃ、きたなと、棒をふりあげているうちに、サーと金の馬がとおりすぎてしもたてんがの。（中略、銀の馬と銅の馬も同様に逃す）また、馬の音がしたんだんが、すぐ棒ではたいたてんがの。

〈通観モチーフ③〉ほうしたれば、手ごたいがあっての、見たれば、きんなのびんぼう神らと。ほうして、「もう一年、このうちに世話になる。」というたてんがの。いきがさけた。[16]

『日本昔話通観』「五八　大みそかの金馬」のモチーフ構成にのっとり、仮に〈通観モチーフ〉を付した。確かに貧乏神の顕現する昔話であり、『日本昔話大成』の話型では貧乏神を冠し、原題にも貧乏神の名を含む。しかし、貧乏神の役割は、モチーフ①において富貴になる予告を行い、モチーフ③で失敗した際には再び舞い込むのみである。モチーフ①は金馬が通るという御告げを行うことができれば必ずしも貧乏神である必要はなく、別の存在と互換が可能である。モチーフ③も、貧乏神が登場せずとも成立する。すなわち、次の昔話であり、同じ話型で貧乏神が別の存在と互換し成立している。

山形県東田川郡朝日村大網（原題「かねの親とぜんの親」）

〈通観モチーフ①〉昔々、爺と婆とあって、正月が来たけれども昆布も買われなくてこまっておった。そこで二人

は八幡様に二十一日間夜籠りをしたら、よめまぐら（夢枕）に神様がたたれて、明日のばんげ（晩）かね（金）の親来るから、しめれ（つかまえろ）、といわれたので、

〈通観モチーフ②〉爺様は八幡様の縁の下に入って、金の親の来るのをおかなくて（おそろしくて）待って居った。夜になって、村の道をあるく人もなくなって、向い山さテカッとあかりがつくと、その明りがだんだん下におりて来て、村の中に入ると、どんどと八幡様の中に入って来て、ガランガランと鈴ふって、拝んで、それからもどるところであったが、爺様はおかなくて、金の親をしめる（つかまえる）ことが出来なかった。そして、とうとうしめあましてしまった。

〈通観モチーフ③〉すると又夢枕神がたって、「明日の晩げ、ぜんの親来るから、しめれ。」といわれたので、爺様は又八幡様に来て待っていると、夜になって、人があるかなくなると、うしろの山さテカッとあかりが出て、トットリトットリと八幡様の中に入って、鈴をガランガランと振って拝んで、もどるところであったが、爺様はおかなくて、つかまえることが出来なかった。朝になって、爺様はしかたなく八幡様を拝んで家に帰って見るとお庭に、ふぐだびっき（がま蛙）ほどのぜんの子が来たので、爺様はそれをひろって、昆布やら色々買って正月をした。[17]

引用の昔話では、モチーフ①では「八幡様」が当該箇所にあらわれる。また、モチーフ③では貧乏神はおらずとも成立する。話型という面から整理するのであれば、貧乏神が登場し原題に「貧乏神」などとされていても、貧乏神を話型の名称に冠するほどの昔話ではない。貧乏神はあくまで互換が可能な要素のひとつである。そこで、『日本昔話通観』の名称をとり、貧乏神の名を冠することのない、昔話「大みそかの金馬」とし、モチーフ構成は、『日本昔話大成』「二〇一Ｂ　貧乏神」をとるのが妥当であるといえよう。

『日本昔話大成』「四七一　何が怖い」、『日本昔話通観』「五九Ａ　貧乏神　―何が嫌い」、『日本昔話通観』「六六一　何がこわい」に該当する話型〈は〉も、また然りである。

群馬県吾妻郡六合村根広（原題「何が一番怖い」）

〈通観モチーフ①〉お正月さ、いくら働いても、お金のたまらない家があったってさ。そうしたらお正月の十四日の朝げ、きょう働いちゃあ、きょう食うような働きしている。起きてまあ、じいさんが、御飯の食べねえで働いてくべえなんて、奥さんと話しいしていたってさ。そうしたら、二階のようなとこから、変なもんが降りて来たってさ。「旦那さん、仕事に行くんか」ってわけだ。「仕事に行かなけりゃあ、きょう食べる食べ物がねえだから、行かなけりゃあなんねえ」「いいじゃありませんか。お茶ぐれえゆっくり飲んで」。それでまあ、お茶くれたりなんだりしていたら、「いろいろ怖い話ぅすべえじゃねえか、いやな話ぅすべえじゃねえか」「ああ、そりゃあよかんべ」「おめえは何が嫌えだい」って、ゆったってさ。そうしたりゃ、そりゃあ貧乏神だったって。「おりゃあはあ、何でも十四日の朝げに、松葉いぶされるが、これが何よりこええ（怖い）」って、貧乏神がゆったってさ。「旦那さんな、何が嫌えだい」って、貧乏神がゆったって。「おりゃあ、何しろお金の財布が何より嫌えだから、そうだから、こうして貧乏だが、別に病みもしねえで、健康で働くだから結構だ」って、旦那さんがゆったってさ。「はあそうかい」で、

〈通観モチーフ②〉まあ働かなくちゃなんねえから、旦那さんが稼ぎ行ったってさ。「よし、これでおりゃあはお金がたまらねえ、こんなに稼えでもたまらねえだから、十四日の朝げに、うんと松葉いぶしてみべえ」子どもに松葉うんとしょわせて来て、いぶしたってさ。

〈通観モチーフ③〉さあそうしたら、その貧乏神が降りて来て、「こんな旦那さんちゅうは、ありゃあしねえ。俺が厭な松葉こんなにいぶして、俺だって、旦那さんのいやな金財布投げてくれる」って、金のいっぱいたまったのを、トサントサンてえらい投げて、そうして逃げて行ったって。[18]

『日本昔話通観』「六六一　何がこわい」モチーフ構成にのっとり、仮に〈通観モチーフ〉を付した。話型〈は〉でも、貧乏神が他の存在と互換されたものが散見される。しかも、話型〈は〉

は、互換された存在もまた、苦手なものがないと成立しない昔話である。そのため、苦手なものもまた互換される要素となる。次に例となる昔話を挙げる。

徳島県美馬郡美馬町（原題「きこりとうわばみ」）

〈通観モチーフ①〉むかし、ある人が山を奥へ奥へと行くと日が暮れてしもうた。ちょうど木挽がいたので泊めてくれとたのむと、木挽は「食う物はあるが何か出て来て、おまえが食われても知らんぞ」というのでいっそ向うの山へ行こうかと思ったが、ひょっと戸口を見ると、大きな「うわばみ」が戸口一ぱいに広がって寝ていた。戸口のうわばみをふまずに中に入れというので中に入り二人は話しをした。何がおとろしいかというので、人間は一分小判がおとろしいというと、そばのうわばみは「煙草のヤニ」がおとろしいというた。

〈通観モチーフ②〉あくる日の晩山うばが来るが、その時じょうろりをかたるから、大口で笑へというた。きこりは七人のきせるのヤニをあつめ「いんろう」につめていた。山うばが来て大口で笑うた時、ヤニを口の中へほうりこむと、うわばみは来年の今頃みとけというてにげてかえった。

〈通観モチーフ③〉あくる年のこん夜またうわばみがやって来て、「去年の今頃おぼえとるか」というて、屋根を上から破って中に入りこみ、こばんをほうりこんで、山奥へいんだが（帰った）が、きこりは殺されると思うたが殺されずに小判がたくさんでけた。[19]

文意のとれない箇所もあるが、貧乏神に相当する存在は「うわばみ」に互換され、苦手なものは「たばこのやに」である。民間では現実に「うわばみ」が苦手であるとされた「たばこのやに」を、昔話でも苦手なものとする。

貧乏神が相手の場合は、働いたり掃除をしたりするという行為を怖いとするものと、何らかの呪術的な行為を怖いとするものがあり、呪術的な行為によるものは、風習と結びつけられるものや、加工すると増えるものを苦手とするなど、苦手の理由を推測できるものもあるが、外部からは意味のないような行為にみえるものもある。貧乏神の苦手と答えるものは『日本昔話通観』でみる限り、働いたり掃除をしたりするという行為を除くと、宮城県仙南地方の事例はから鉢をまわすのと火を焚くこ

と、群馬県吾妻郡六合村根広の事例は十四日の朝に松をいぶすこと、新潟県新発田市東新町の事例は掃除に並び塩水をかけられると体が溶ける、新潟県上越市東本町の事例は念仏、新潟県中魚沼郡川西町高倉の事例は豆殻を燃やすこと、京都府宮津市松尾の事例は酢、岡山県苫田郡加茂町の事例は清潔にすることと豆腐を焼く香り、岡山県苫田郡上斎原村本村の事例はおから、香川県仲多度郡多度津町佐柳島長崎の事例では豆腐とおから、香川県仲多度郡多度津町佐柳島長崎浦の事例は古い味噌と、様々である。相手が、現実で認識し難い「貧乏神」である場合には、現実でも認識が可能な「うわばみ」のように、現実に苦手とされるものを想定することができないため、筋書きを保ち、また面白くするために、無意味な行為を貧乏神の苦手なこととしたのであろう。

この話型であっても、貧乏神は別の存在と互換しても成立する。貧乏神を話型の名称に冠するような、これまでの貧乏神の昔話と同列に扱うべきではない。名称ならびにモチーフ構成ともに『日本昔話大成』「四七一　何が怖い」もしくは『日本昔話通観』「六六一　何がこわい」をとるのが妥当であるといえる。これにより二重に整理されていた『日本昔話通観』「五九A　貧乏神—何が嫌い」は解消される。

残るは、『日本昔話通観』「五九B　貧乏神—大食い型」に該当する、話型〈に〉だが、そもそもこの話型を挙げる『日本昔話通観』には、この話型に合致する昔話がほとんどない。合致するとして示される該当の昔話を確認しても、これまでに整理した話型に落としこむことのできる昔話、乃至、孤立伝承話である。このような話型は、登場する貧乏神という要素を別の存在として互換できないならば、昔話「貧乏神　—孤立伝承話」とするのが妥当である。

これまで、『日本昔話大成』、『日本昔話通観』で整理されていた話型を整理し、昔話「貧乏神　—随伴型」、昔話「貧乏神—退散型」、昔話「貧乏神　—招集型」、（昔話「貧乏神　—孤立伝承話」）、昔話「大みそかの金馬」、昔話「何が怖い」と、整理しなおすことができた。昔話「貧乏神　—〇〇型」とした昔話は、貧乏神が他の存在と互換すると成立しないもので、貧乏神を論ずるにあたっては、殊に重要な話型といえよう。

五　昔話「貧乏神」構造整理

整理した話型を用い、貧乏神を別の存在と互換できない話型を炙りだしたところで、何が得られるだろうか。

昔話「貧乏神　—随伴型」、昔話「貧乏神　—退散型」、昔話「貧乏神　—招集型」をさらに確認すると、細かい要素を削ぎ落とすことができる。すなわち、昔話「貧乏神」の素地となる、次のような話型にまとめることができる。

昔話「貧乏神」

一、主人公は何らかの行為をする。
二、貧乏神があらわれる。
三、(a) 貧乏神は退散する。(b) 貧乏神は随伴する。(c) 貧乏神は招集する。

つまり、これまで抽出した話型である、昔話「貧乏神　—随伴型」、昔話「貧乏神　—退散型」、昔話「貧乏神　—招集型」は、昔話「貧乏神」のモチーフ三による分岐に過ぎない。構造を整理すべく、まずはモチーフごとに並べ、富貴と貧窮の流れを確認する。

	〔一〕	〔二〕	〔三〕
昔話「貧乏神　—退散型」	推奨する行為		貧乏神　退散〈富貴示唆〉
昔話「貧乏神　—随伴型」	無意味な行為	隠匿された	貧乏神　随伴〈貧窮維持〉
昔話「貧乏神　—招集型」	忌避する行為	貧乏神の出現	貧乏神　招集〈没落示唆〉

モチーフ一において行った行為により、モチーフ二で隠匿されていた貧乏神（—）が顕現するまでは、いずれも同一である。モチーフ三で貧乏神（—）が退散し（＋）となることで通常の状態にもどるものが「退散型」となり、貧乏神（—）が随伴する、すなわち、（—）がそのままであるものが、「随伴型」となり、貧乏神（—）が招集する、すなわち、（—）が増加するものが、「招集型」となる。それぞれ、「退散型」は通常の状態にもどったのみだが、富貴が示唆され、「随伴型」は、このまま貧窮が維持され、「招集型」は、さらなる貧窮による没落が示唆される。

これを構造としてみるため、さらに（—）を付し、モチーフ構成にとらわれず話の中での時系列をみると、次のような構造の整理が可能である。

常の家宅（±）→貧乏神（−）憑依→推奨する行為による貧乏神　退散 −（−）→〈富貴示唆〉（±）
常の家宅（±）→貧乏神（−）憑依→無意味な行為による貧乏神　随伴 ±（−）→〈貧窮維持〉（−）
常の家宅（±）→貧乏神（−）憑依→忌避する行為による貧乏神　招集 +（−）→〈没落示唆〉（−2）

すべては、常の家宅に（±）貧乏神（−）が憑依し、（−）に傾くが、その際に行った動作によって、貧乏神（−）は、減少、維持、増加のいずれをとるか、という構造である。ここでは紙面であるため該当の行為を、推奨する行為、無意味な行為、忌避する行為と書かざるを得ない。しかし、どのような行為が、推奨する行為、無意味な行為、忌避する行為であるとはじめから規定されているわけではない。貧乏神（−）が退散（−）した、−（−）となる行為であったから、つまりその行為は（+）である推奨する行為である、貧乏神（−）が憑依したまま（±）であるから、±（−）となる行為であったから、つまりその行為は（±）である無意味な行為であったのである、貧乏神（−）が増えた（+）から、+（−）となる行為であったから、つまりその行為は（−）である忌避される行為であったのである、とする。

これを再度、あえてモチーフ構成にもどすと、モチーフ一が推奨する行為であるか、無意味の行為であるか、忌避する行為であるかは、モチーフ三によって規定される。モチーフ一が忌避する行為にみえても、モチーフ三で貧乏神の退散（+）ならば、モチーフ一は推奨する行為（+）とみなされ、一例として、年越に火を焚く由来譚[20]となるものもある。モチーフ一が推奨する行為にみえても、モチーフ三で貧乏神の増加（−2）ならば、モチーフ一は忌避する行為（−）とみなされる。便宜上、世俗的な行為か、呪術的な行為かと分けたものの、現在の価値観によるものであるため、本来は分ける必要もないかもしれない。

昔話「貧乏神」は、特定の行為を、推奨、無意味、忌避すべきものであると断ずる、教訓を基盤とした昔話であるということができよう。

結言

貧乏神の登場する昔話の話型の整理は混乱していたが、改めて整理すると、貧乏神が登場しなければ成立しない、話型名に貧乏神と冠するにふさわしい、昔話「貧乏神　—〇〇型」とできる孤立伝承話を含む四つの話型と、要素のひとつに貧乏神が登場することもあるが別の存在に互換が可能である昔話とに分けることができた。

前者の、貧乏神が他の存在と互換することのできないものに限ると、昔話「貧乏神　—随伴型」、昔話「貧乏神　—退散型」、昔話「貧乏神　—招集型」、それに、孤立伝承話をあわせたものとすることができる。

さらに、昔話「貧乏神」としてまとめることができ、構造までも踏みこめば結末に貧乏神がどうなるかによって、特定の行為を、推奨するか、無意味か、忌避する行為か断ずるものであった。昔話「貧乏神」は、教訓を基盤とした昔話であることが確認された。

本稿での作業は、あくまで昔話にあらわれる貧乏神についての基礎研究に過ぎない。すなわち、昔話「貧乏神」を研究するに用いる事例の指針を示したものであり、背景からは、現行の話型整理の不備を指摘できよう。本稿では紙面の都合により基準を示すに留め、具体的な事例の比較は趣旨が異なる点、今後の事例の増加を考慮する点、本稿で整理した話型の複合した昔話の事例のある点から、厳密な話数を示すことはあえて行わないが、管見に入る貧乏神のあらわれる昔話の事例の約一二〇例[21]は、ほとんどすべて本稿の話型の分類で整理することができる。本稿で示す話型を応用した論考は改めて示したい。話型に関する考察の一助となれば幸いである。

註

(1) 拙稿「日本における貧乏神譚の研究」『國學院雑誌』第一二〇巻第七号、國學院大學、二〇一九。
(2) 拙稿「貧乏神図像の変遷」『國學院大學大學院紀要—文学研究科—』第五十五輯、國學院大學大学院、二〇二四。
(3) 加藤まどか「貧乏神伝承の構造」『國學院大學大学院文学研究科論集』第三七号、國學院大學大学院文学研究科学生会、二〇一〇。
(4) 関敬吾・野村純一・大島廣志編『日本昔話大成第一一巻　資料編』角川書店、一九八〇。
(5) 『日本昔話通観第二八巻　昔話タイプ・インデックス』同朋社、一九八八。
(6) 佐々木徳夫編『日本の昔話一一　永浦誠喜翁の昔話　宮城』日本放送出版協会、一九七五。
(7) 石川純一郎『会津舘岩村民俗誌』舘岩村教育委員会、一九七四。
(8) 水沢謙一『赤い聞耳ずきん』野島出版、一九六九。
(9) 大藤ゆき『鎌倉の民俗』かまくら春秋社、一九七七。「民間文芸」によった。
(10) 越智郡玉川町教育委員会・越智郡玉川町教育研究会編『玉川の民話』越智郡玉川町教育委員会・越智郡玉川町教育研究会、一九六九。
(11) 下田村立鹿峠中学校編『越後下田郷昔話集』下田村中央公民館、一九七六。
(12) 武田正編『日本の昔話四　羽前の昔話』日本放送出版協会、一九七二。
(13) 柴口成浩・柴口幸子編『三室むかしこっぷり—岡山県阿哲郡神郷町三室昔話集—』発行所不詳、一九六九。
(14) 有馬英子編『全国昔話資料集成三　鹿児島昔話集』岩崎美術社、一九七四。

(15) ただし、前近代の文献に載る事例ながら、文化八年（一八一一）の『春波楼筆記』にある、鎌倉の「どこも地蔵」にまつわる伝説は、「鎌倉にどこも地蔵と云ふあり。或時堂守の僧参詣もなき堂を守るより、何方へなりとも立ちのくべしと思ひ。其の夜夢に地蔵の曰く、どこも〳〵と云ふ。老僧目を覚し考へ思ふに、何方も〳〵同じ事と云ふ事なるべしとて、生涯此の堂に終りぬ」と、類話であり貧乏神が「どこも地蔵」に互換されたような話がみえる。しかし、「どこも地蔵」は追跡しようとするわけではなく、追跡しようとする存在であるのであれば、貧乏神でなければ成立しないであろう。（『日本随筆大成〈第一期〉二』吉川弘文館、一九七五。「春波楼筆記」によった）

(16) 水沢謙一『おばばの昔ばなし』野島出版、一九六六。

(17) 清野久雄『千貫長者―庄内の昔話―』庄内民俗学会、一九六八。「致富ばなし」によった。

(18) 柾谷明編『全国昔話資料集成三一　吾妻昔話集』岩崎美術社、一九七九。

(19) 荒岡一夫『美馬の民俗 前編』発行所不詳、一九六三。

(20) 牛津町民話採訪報告書『牛津の民話』によると、佐賀県小城郡牛津町の事例として、「また、伝承場所として興味を引くものに、大歳の晩の火焚き場所であるにわんなか（土間）とするものがある。これは、詳しくは不明であるが、友田地区において、十二月三十一日、土間で菊等を燃やす行事が行れた際、貧乏神を追い出す話や福の神を入れる話（両者とも採集はできなかった）とともに昔話が語られていたということであり、昔話の機能が単に娯楽や教育のためだけでないことを示すものといえよう」とある。「貧乏神を追い出す話」は、恐らくは昔話「貧乏神　―退散型」であり、年越に火を焚くことを推奨する行為とするための由来譚ではないだろうか。（牛津町民話採訪報告書『牛津の民話』佐賀民話の会、一九八五。「採訪結果の概要」によった）

(21) 昔話集には稀覯本も多く、事例の偏りを避けるために、また、本稿はあくまで話型に関する論考であるために、おおよその参考とするには問題ないと判断し、資料集にのみ紹介される事例も数に含めた。